

水野教育長記者会見 概要

日時：令和 7 年 3 月 28 日（金）16 時 30 分～17 時 08 分

場所：大阪府庁別館 6 階 委員会議室

【水野教育長より】

教育委員会の取り組みについて

今年度の 4 月から教育長定例記者会見を毎月開催しましたが、いよいよ令和 6 年度の最後の会見となります。どうぞよろしくお願い申し上げます。

①令和 7 年度大阪府立高等学校入学者選抜の結果について

昨日 3 月 27 日に、令和 7 年度の公立高校の入試が終わりました。今年の公立高校入試を巡りましては、さまざまな話題が取り上げられました。私からは大きく二つのことについて皆様にお伝えいたします。

一つめは、「高校入試のデジタル化」です。

受験生や保護者の負担軽減を目的に、今回の公立高校入試から、出願から合格者発表まで、全てオンラインで実施いたしました。

受験生はスマートフォンなどで出願し、合格者発表も、高校での掲示は行わずにオンラインで行うとともに、試験の点数等も同時に見ることができるよういたしました。

また入学検定料や入学料も、クレジットカードなどオンラインでの決済ができるようになりました。今、多くの自治体や私立の学校でもオンラインによる出願は行われておりますが、大阪府の特徴としましては、全てオンラインで行ったということです。

調査書、いわゆる内申書もデータによる送信としましたので、原則、書類を送るといった作業がございません。

今、国においても、高校入試のデジタル化としまして、出願の完全オンライン化を示しておりますが、大阪府はそれに先駆けて取り組んだということが一つの成果であったと考えております。

また、採点についてもデジタル採点を、今年度は導入いたしました。これまでのように紙の答案を 1 枚ずつ採点、計算をするのではなくて、問題ごとに画面上で採点をしながら、点数は自動計算により行いました。

高校からは採点時間の短縮に繋がったとの声も聞いております。導入初年度ということもあり、今回の取組みを検証しながら、府立高校への入学をめざす子どもたちや保護者にとってより良いものになるよう、進めてまいります。

二つめは、速報値になりますが、「入試結果、概況」です。

全日制と、昼間の定時制である多部制単位制・昼夜間単位制をあわせた、いわゆる「昼間

の高等学校」の入試の結果は、速報値ですが、募集人員 3 万 6,464 人に対し、志願者は延べ 3 万 7,109 人、全体を通しての平均志願倍率は、1.02 倍となりました。

志願割れとなった学校数は 79 校でございます。そのうち、40 人以上の志願割れは 23 校となり、40 人以上の志願割れ校数は、昨年と比べて 3 校増加となりました。

この間、各学校の志願状況についてもご注目いただきましたが、改めて現段階の認識をお伝えします。

まず、秋頃の定例記者会見でも、記者の皆さんにお伝えしましたが、大阪府としては、公私合わせた募集人員は、進学を希望する全ての生徒を受け入れられるよう、余裕を持った設定をしているのが大原則です。

言い換えれば、どこかの学校では必ず志願割れが起こるということです。その中で、私立高校等の授業料無償化制度もあり、子どもたちは行きたい学校を自由に選択できる環境が整いつつあります。

その意味では、義務教育段階を終える多くの子どもたちが、しっかりと自分の進路を選択し、自己実現に向けた新たなスタート地点に立つことができたと考えております。

昨日に結果が出たばかりなので、分析はこれからになりますが、今後の大きな方向性といたしまして、本日の教育委員会会議の議題にもなりました「府立高校のグランドデザイン」や新たな選抜制度をはじめ、府立高校の更なる魅力化・特色化というものを図ってまいります。

この 1 年間で、私自身も多くの府立高校を訪問し、実際に授業を見てきたり、施設を見てきたり、校長先生と 1 on 1 でお話をしたりさせていただきました。普通科 1 つとっても、生徒の学習活動や行事、部活動などの取組みはどれも違い、それぞれに良さがありました。

よく公立・私立という言い方をしますが、やっぱり公立もそれぞれの特徴があると思います。私立のお話を聞いても、「私学とひとくくりにされても。」という声も聞いたことがあるぐらいです。それぞれ学校ごとに特色や個性があると感じております。

こうした府立高校、各校の良さや強みをアピールし、大阪の子どもたちにとって「入学してよかった」、「この学校に入りたい」、地域の皆さんから「良い学校やね」と言っていたけるような学校作りを行ってまいります。

②府立高校改革グランドデザイン・大阪府立高等学校入学者選抜制度改善方針について

先ほどの教育委員会会議で議決をいただきました「府立高校改革グランドデザイン」と「大阪府立高等学校入学者選抜制度改善方針」についてご説明いたします。

まず、「府立高校改革グランドデザイン」です。このグランドデザインは、令和 6 年 8 月の大阪府学校教育審議会答申をふまえ、「学校改革」「入試改革」「広報改革」の三つの柱を軸に、府立高校に求められる方向性と、それをふまえたより望ましい入学者選抜制度等について検討し、取りまとめたものとなります。

今後、学校関係者等と意見交換を行い、より具体的な改革の方向性を示した「府立高校改

革アクションプラン」を次の秋を目途に取りまとめる予定としております。

次に、「大阪府立高等学校入学者選抜制度改善方針」についてです。1月の教育委員会会議で案を示し、この間、さまざまなご意見をいただきました。いただいたご意見をふまえ修正した改善方針を、先ほどの教育委員会会議において議決をいただいたところです。

細かな表現の変更もございますが、大きな変更点は2点です。

一つめは、学校特色枠の設定です。1月の案では、「アドミッションポリシー枠（仮称）」という形で、皆さんにご説明したと思いますが、この名称ではやはり趣旨が伝わりにくいなというようなご意見もあったことから、「各校の特色と受験生の興味関心とが合致する選抜制度」という目的が伝わりやすい名称といたしました。

二つめは、公立高校第2志望校への出願機会です。

これまでは「複数校志願の導入」としておりましたが、「第2志望校での合格者の決定は、第1志望校の志願者数が募集人員に満たない学校で行う」ということが伝わりにくいことから、表現を変更いたしました。

また、公立第2志望校を希望する受験生は、第2志望校に合格した場合、私立併願校と公立校のどちらかを選択して進学することとしております。

今回の選抜制度改善につきましては、この間の社会の急速な変化に伴う、子どもたちや保護者の学びに対するニーズの多様化に的確に対応するために、府立高校改革の一環として行うものです。

今回のものは、あくまで令和10年に実施する新たな選抜の大きな方針、枠組みとなっておりますので、先ほどご議決いただいたこの方針をもとに、詳細な制度設計に向けて、引き続き、関係各所のご意見を伺いながら検討を進めてまいります。

③府立西浦支援学校のセーフティプロモーションスクール（SPS）の認証について

「セーフティプロモーションスクール」というのは、「自助・共助・公助」の理念のもと、我が国独自の学校安全の考え方を基盤とする包括的な学校安全推進を目的として構築された取組みで、大阪教育大学 学校安全推進センターが認証する制度です。

府教育庁におきましては、SPSの認証を受けることで、子どもたちの安全確保や教職員の意識向上、保護者等の学校に対する信頼が高まることに繋がると考えており、SPSに関する研修の周知や、認証をめざす学校に対して個別支援に努めてまいりました。

このたび、本年1月に、府立西浦支援学校が、水害時の対応訓練や防災教育等の取組みを進めることで、府立学校で2校目となるSPSの認証校となり、3月24日に認証式を行いました。

府教育庁といたしましては、学校安全の充実を図るために、SPS認証をめざす学校園がさらに増えていきますよう、研修等におきまして学校安全に関する先進的な取組みの好事例を紹介するなど、普及啓発に努めてまいります。

④府立近つ飛鳥博物館 令和7年度春季特別展の開催について

府立近つ飛鳥博物館では、日韓国交正常化60周年事業の一環として、4月5日土曜日から5月25日日曜日まで、「百済の王氏（くだらのこにきしし）―絶統を紹ぎ興す―」と題した春季特別展を開催いたします。

「百済の王氏（くだらのこにきしし）」は、朝鮮半島の古代国家「百済」の王族の末裔で、大阪市や枚方市を拠点として、飛鳥時代や奈良時代を中心に活躍しました。

中でも、同氏が現在の宮城県で発見した砂金を、聖武天皇に献上したことで、東大寺大仏の造立が大きく進展したというエピソードが知られています。

本展では、大阪市や枚方市、宮城県の多賀城市などの同氏にゆかりの深い、各地の遺跡から出土した、古墳時代から平安時代の史料を中心に、230点を陳列いたします。

国指定の重要文化財や今回が初公開となる出土品など、貴重な展示品ばかりですので、この機会をお見逃さないよう、お越しください。

また、会期中には、博物館の内外でさまざまな関連事業も予定しております。講演会や、古代のボードゲーム「かりうち」の体験会、そして韓国百済地域の遺跡にスポットを当てた写真展などの館内イベントの他に、大阪歴史博物館での国際シンポジウムや「百済の王氏（くだらのこにきしし）」の足跡をたどる現地見学会など、世代を問わず楽しんでいただけるイベントが盛りだくさんです。皆様のご参加をお待ちしております。

⑤教職員人事課 公式インスタグラムの開設のお知らせ

このたび、教職員人事課 公式Instagramを開設いたしました。このアカウントでは、教員採用選考に関する情報だけでなく、大阪府内の公立学校で働く教職員の働きがいや教職の魅力をはじめとしたさまざまな情報を発信していきますので、ご覧いただき、ぜひフォローの方していただくよう、お願いします。

現在、令和7年度に実施する令和8年度の教員採用選考テストの出願の受付をしております。今回の募集にあたっては、採用予定数を前回の実施時から580名増加するとともに、多くの方に受験いただけるよう、新たに年齢制限の撤廃等も行いました。

4月18日金曜日の18時まで出願を受け付けております。

また、グローバル化に対応した英語教育の推進を担う「英語エキスパート教員」の採用選考も募集しております。こちらも5月16日金曜日の18時まで出願を受け付けております。

大阪府の公立学校でご勤務を希望される皆様は、ぜひご出願いただければと思います。

⑥表敬訪問について

表敬訪問として、府立枚方高等学校の生物飼育部が、「イオン エコワングランプリ 普及啓発部門」で、文部科学大臣賞を受賞したという表敬訪問と、3月25日に府立富田林中学校・高校が、「コミュニティスクールと地域学校協働活動の一体的推進」にかかる文部科学大臣表彰の優秀賞を受賞したという表敬訪問を受けました。

【質疑応答】

○大阪府立高等学校入学者選抜方針に係る今後のスケジュールについて

(産経新聞)

府立高校改革についてです。グランドデザインについては、秋頃をめどに決定し、入学者選抜制度改革はこれから詳細の制度設計を行うということですが、いつまでに決めるのでしょうか。

また、「学校特色枠」と名前が変更になりましたけども、いわゆるアドミッションポリシーを各校が掲げて、これに見合う学生を集めたいという趣旨で行うのは変わらないと思いますが、そのアドミッションポリシーを新制度に向けて掲げるタイミングなど、そのようなタイムスケジュールが決まっていれば、教えてください。

(水野教育長)

今回、ご議決いただきましたばかりですので、これから詳細を詰めていく大まかなスケジュールにはなりますが、令和7年度の秋ごろを一つのめどとはしています。

この理由としては、従前からお伝えしているように、そもそも令和10年から新制度に変わりますので、今現在の小学6年生が中学1年生になる段階で、周知期間を長くとりたいという理由から、一定のお示しをするのは来年度の中ごろをめどと考えております。

(産経新聞)

それはアドミッションポリシーも合わせて、というイメージでよろしいですか。

(水野教育長)

はい。まさに各校のアドミッションポリシー、学校特色枠をどういう形で設定していくかという議論をしていきますので、そのあたりを踏まえて、全校同時に出していくのか、何月何日に全校まとめて出していくのかというところまでは検討中です。

○公立高校の志願割れに対する受け止めと今後について

(産経新聞)

今年の入試と合わせてお伺いします。定員割れの学校数が、昨年と比べて増えた状況にあって、冒頭おっしゃった通り、ある程度定員割れは想定されているのですが、あまりに増えすぎるのも少し問題ではないかという声もあるかと思います。

その中で入試制度改革、グランドデザインの取りまとめで魅力向上に手がけていくものと思いますが、定員割れに関してどれくらいが適切かと考えておられ、今回の入試制度改革、グランドデザインの取りまとめによって、こういったところで落ち着かせていきたいとお考えなのか、今後の方向性のお考えを教えてください。

(水野教育長)

志願割れに関しては、ちょうど1年前の入試では「志願割れが70校という状況を、どのように教育庁として受け止めていますか。」と、まさに私の初回の記者会見での皆さんからのご質問だったかなと記憶しております。

そのときに、「やはり選ばれる高校になることは、めざすべきであって、志願割れの学校数がおっしゃるようにバランスを欠いて、どんどん増えていくというのは望ましくないので、数値としては真摯に受け止めています。しかし、志願割れをゼロにすることが目的ではない。」というふうに私はお答えしたと思います。

今回、志願割れが79校でした。その数値に関して、いわゆる志願割れをしたというところは、選ばれないという何かしらの理由の分析がやはり必要ですので、その点については改善に繋げていきます。

かといって、志願割れが50校にずいぶん減ったらよかったのかというと、「それだけ多くの子どもたちが望んだにも関わらず、希望するところには行けなかった。」という状況も作り出したとも考えられますので、このあたりはどこが適切なバランスなのかは、時代の背景もあると思います。

まさに私学の無償化の状況や子どもの数の減少なども諸々ございます。そういうところも包括的に捉えて考えていくところかなと受け止めております。

○公立高校の定員割れの状況を受けて

(産経新聞)

包括的に受け止めていくということですが、具体的な数値を表すのは難しいのかもしれませんが、適切なラインもしくはゾーンといいますか、こういった状況が好ましいとお考えですか。

今回、寝屋川高校の定員割れが衝撃をもって受け止められたところがあるんですけど、トップ校や上位校に関しては、受験競争を経験することも大事だという考えもあるのかなと思ったりするんですけども。

(水野教育長)

まさに、そこがバランスなんですよね。受験競争が過度にあったときには、子どもを競争にさらすな、やり過ぎだという意見になりますし、逆に倍率が1.0倍を切ると、一定の競争は必要であろうという意見になります。その質問の二つの見解に対して、各々の適切どころはいくつなのかと、数字でそれは示せないと思います。

ですので、子どもたちの未来を一つ決めていく大事な高校入試において、その点で一つの数値を出す難しさであると感じております。

おっしゃるように、伝統校と言われる寝屋川高校が、志願割れになったことは、大きく捉

えられたかと思います。

私があんまりピンとこないのですが、「寝屋川ショック」という言葉が報じられましたけど、誰がショックを受けてるんでしょうか。誰がショックを受けているのか、私も全ての皆さんの記事読ませていただきましたが、これはおそらく関係者かなと思うんですね。

関係者からすると、「寝屋川高校ってあんなに名門で進学実績もいいのに、なんで割れたんだろうか、びっくりだ。」という意味合いだと思うのですが、私はずっとサプライサイドの考えではなくて、デマンドサイドの視点でもう少し考えていくべきではないかという立場で皆さんにもお話をしてきましたし、また、庁内でも話をしているのですが、寝屋川高校に行きたいと思って頑張ってきた子に関しましては、私は今回、むしろ良かったんじゃないかという視点も忘れてはいけないと思います。それが全てではないですよ。

むしろ、「寝屋川ショック」と書かれた内容を精査していくと、昨年度比で倍率マイナス 0.16 なんですよ。結果が 0.94、つまり下げ幅はマイナス 0.16 でした。でも結構ショックを受けたのは、大きく増えたところだと思うんですね。

例えば、教育文理学科がある桜和高校は、昨年度比でプラス 0.33 倍、倍率としては 1.31 倍でした。これは、「寝屋川ショック」の主語を仮に関係者だとしたら、喜ばしいことと捉えるでしょうか。

でも、受験生にとっては去年の桜和高校の倍率は 0.98 倍だったんです。そこをめざして先生になりたいとこの高校をめざしていた子にとっては、桜和ショックですよ。四條畷高校も同じで、プラス 0.25 で 1.44 倍です。

なので、私はこのショックを受けたという主語をもう少し記者の皆さんにも、考えてほしいなと今回思いました。関係者が受けたんですよ、「寝屋川ショック」というのは。

私は、これで記者の方に強いるわけではないですけど、あまり関係者側の「寝屋川ショック」という言葉を、1 人歩きさせて欲しくないなと思うんですよ。

寝屋川高校ってすごいじゃないですか。でも、今年頑張って受けた子どもたちが将来、「お前、あの寝屋川ショックの年の人やろ」と、その子らが言われたら、どんな気持ちになりますかね。これは、もちろん大きな志願割れであるとか定員の問題などを考えていかないといけないのですが、やっぱり受けた子どもたちのことも考えていかないといけないなと感じるところです。

○公立入試日程の前倒しの意義、懸念点、期待する点について

(NHK)

本日、採決で決定した入試改革の中で、入試日程の 3 月 1 日への前倒しについてです。改めて今回正式に決定して、令和 10 年から導入されるということですが、この意義と、そして私学団体からの懸念の声もあった中でも、最終的に落ち着いたので、そういった意味で、メリット部分だけなのかそれとも導入までに今後改善していくべき、いわゆる懸念点というか改善点があるのか、この辺りをお願いします。

(水野教育長)

ご案内の通り、入試日程の基準日を3月1日にいたしました。こちらに関しましては、合格発表後から入学までの期間を、高校生活に向けた十分な準備期間として確保するために、現行の一般選抜よりも10日程度早めることとしました。これが、メインの理由となります。

また、現行の大阪府公立高校の入試の日程は、全国的に見ましてもずいぶんと後ろで、合格発表の日程でいうと47都道府県でおそらく最後だったかと思います。そもそも大阪府の日程はかなり後ろに設定しております。

後ろに設定しているメリットとデメリットは両方あります。デメリット部分で言われるのは、やはり私立入試がスタートする2月の前半から、公立入試が終わるところまでの間、ずいぶん長い期間になってきますので、そこでの子どもたちや保護者の負担が大きいという声はあります。

この辺りは、もちろん前倒しにしていけばその分、改善されるポイントもありますが、変化によって出てくるデメリットもあろうかと思います。今、ご質問にあったデメリット部分では、何が想定されるかという、まず思い浮かべないといけないのが中学校の教育課程への影響です。10日分の教育課程です。

ただ、先ほども申し上げたように、他府県の状況等を見ましても、3月1日というのは無理のある日程ではないと考えております。

また、この新たな制度の導入というのは、およそ3年後ですので、引き続き中学校等にも、制度変更の趣旨を丁寧に伝えていきたいと思っております。

あと、私立の受け止めに関しましては、私学団体には1月20日に選抜制度改善案を示した後に意見交換を行ってまいりました。入試日程の前倒しにつきましては、中学校現場の進路指導への影響などの懸念なども示されたと理解をしております。

公立の入試制度改革が、やはり私立高校にも影響を及ぼしていくことから引き続き、私学団体とも意見交換をしていきながら、生徒にとってよりよい制度となるように、詳細の検討は進めてまいります。

○公立高校の募集人員の設定について

(読売新聞)

入試の定員について、これまでも何度か出ているお話ですが、このタイミングなので改めてお伺いします。

志願割れが40人以上の中でも100人を超えている学校もある中で、100人にならないような設定の仕方は、やろうと思えばできるんだと思うのですが、活力ある学校を作るといった観点からおそらくしていないのかと思います。

一方で、受験生からすると、「自分の学校はこんなに割れているんだ」と、少しがっかり

する部分でもあるかと思いますが、地域にとってもそういう印象も与えると思いますが、そのあたりの柔軟に定員を設定する難しさというのは、どういう理由なのか改めて教えていただけないでしょうか。

(水野教育長)

おっしゃるように定員については、やはり子どもの数が減り続けている以上、柔軟に考えていくべきだと思っております。

しかし、今回 1 クラス未満の定員割れの学校が 50 校ぐらいですので、1 クラス全部減らしたとしたら、結果論的には去年 70 校だった定員割れは、今年は 40 校となり、教育委員会はとてもがんばったんだと映りますけれども、それこそ定員割れが本当に第 1 の問題であるのであれば、私はそれをあまり成果として誇るものではないと思います。

ただ、記者がご指摘の子どもの立場に立ったときに、自分の学校がこのように言われてるのかっていうところのお気持ち自体はわかるつもりです。そこはおっしゃるように定員に関しましては、一定活力の担保という点で、6 クラスから 8 クラスを維持しております。ちなみにこれは、全国の公立高校の平均クラス数でいうと、大阪は全国で 4 番目なんです。

6 クラスを下回ることが基本的な再編整備の対象になったところへの措置として、5 クラスもしくは 4 クラスにするということもございますので、一定この基準を守りながらも、柔軟に考えていくステージにはなっていくと同時に考えています。

ただ、この場において、6 クラスから 8 クラスという基準を 5 クラスから 7 クラスにするというものではありません。

○私学授業料無償化の影響に対する受け止め

(毎日新聞)

今回の定員割れの学校が 79 校と、昨年度よりも定員割れの数が増加し、40 人以上割れた学校も 3 校増加しました。

まず、無償化の影響を絡めて、改めてどういう受け止め方をされてるのか、お伺いできますでしょうか。

(水野教育長)

この令和 7 年の入試に関して、まだ分析としては出ていない段階ではありますが、おっしゃるように無償化の影響は、一定影響しているという見立ては持っているつもりです。というのも、昨年段階でも高校 3 年生の無償化が始まったとき、やはり一定の数字の変動がありました。一方で、公私比率だけを見るとさほど変わらなかったというのが昨年の検証です。

ですので、今回の令和 7 年の検証においても、昼間の高校に通ってる子たちの総数を 100 としたときの、公立に行った子と私立に行った子の比率が、仮に大きく私立側に変動してい

たとすれば、無償化の影響は 100%ではないにしても、影響があるというふうになると思います。

(毎日新聞)

すると、今後の分析次第でこれからの対応としても考えていくということでしょうか。

(水野教育長)

そうですね。仮の話にはなり、府立の設置者目線だけの視点になるのですが、私立を切磋琢磨する相手として、無償化の影響で私立を選ぶ子たちがいるのであれば、公立にもっと目を向けてもらえるためには、どういう学科を作り、どういうプロモーションをしていくのか、どういう特色・魅力化をしていくのかというのは、当然考えていくべきだと思っております。

ただ、私の今の立場、公私ともに大阪全体の公教育を見ている立場からすると、昨年度は子どもたちの私立に対する人気が出て、60%の子は公立を選んでいきますので、やはりみんなが、このように行きたい高校を選べるようになっていく、そして、特に私立の場合は、お金の問題がありましたので、それがなくなっていったこの社会変革に対してはいいことだなと思っています。

○公立高校入試日程の前倒しによる期待する効果

(関西テレビ)

先ほど NHK さんからも質問があった入試日程の 3 月 1 日への前倒しの件でお伺いしたいです。

先ほど、大阪府は 47 都道府県の中で合格発表もだいぶ後ろの方で、私立の日程から考えると、受験期間が長くなってしまうことが負担で、それが改善につながるのではないかと、うご発言があったと思います。

そうしますと、生徒目線になりますと負担が大きいから、私立だけを受験していた人たちの流入ですとか、公立高校の志願者数の増加への期待の部分もあると思いますが、その辺りは、どのように感じていらっしゃるか、お伺いできますでしょうか。

(水野教育長)

先ほど申し上げたように、入試日程を 3 月 1 日にしたメインの理由は、高校に上がるときの引き継ぎの期間を取っていきましようということです。この理由は、残念ながら府立高校の中退率、不登校率の高さを課題視しているんです。

そこは、合格した後に事前に中高が連携を取ったり、子どもがプレ登校をしたりして、気持ちを慣らししていくようにして、その課題を解決できればいいなと思っています。ここがまず第 1 なんです。

その上で、副産物的なところで他に何かないかと言われれば、先ほど申し上げたような私

立の入試期間から公立の合格発表までの受験期間が、大阪は結構長い設定になっていますので、その負担の声も実際あり、その負担を解消することにも繋がるという副産物的なお話です。

ですから、府立高校を選ぶ子が増えるであろうというのは、あまり議論にも上がっておらず、いわゆる志願者数を増やすための政策ではないと理解をしております。

(関西テレビ)

私の質問の仕方が悪くてすみません。副産物的なものであることは重々理解しているのですが、副次的な理由でそういう効果もあるのではないかと考えており、教育長的にはそこはあまりないというふうに考えてらっしゃるということなんでしょうか。

(水野教育長)

その変化によって、私立よりも公立を選ぶ子が増えるかという質問でしょうか。

(関西テレビ)

そうですね。公立を今まで選んでなかった子たちが、公立を選びやすくなるのではないかっていう効果ですね、その辺についてはいかがですか。

(水野教育長)

まず、私立を選ぶ子は専願で受けると思うんですよ。「この私立に行きたい」という思いを持っているので、今年の私立の入試日は2月12日だったかと思いますが、公立入試の日程が3月1日になっても、私立に行きたい子はやはり専願で、受けるんじゃないでしょうか。

○全国の授業料無償化による期待される財政負担の軽減について

(朝日新聞)

先日、府議会の方でもご答弁されてたと思いますが、再来年度以降、全国的な無償化で大阪府の財政負担が減るということで、これについてはやっぱり教育の方に使ってほしいという議員の声もありました。その辺りについて、現時点で何か大きな方針などを考えてありますでしょうか。

(水野教育長)

特にございませぬ。というのも、記者の皆さんのほうが詳しいかと思いますが、今の段階で、今年度は37億円、次年度が257億円だったかと思いますが、大阪府として無償化に使っていたお金が国の予算でできることで、その分、大阪のお金が浮きますよねというお話だったかと思います。

その政治決着のところは、私はなかなかわからないところなのですが、場合によっては、いろんな政局の中で、石破総理が考え直すとなった瞬間、一気に「捕らぬ狸の皮算用」になりますので、私が決めるべきことではないんですが、やはり慎重に発言はしないといけないと感じているところです。

ただ、本当にそのように確定していったときに、我々としては、子どもたちのための環境整備や先生方の負担軽減のために、財政負担で浮いたお金があろうがなかろうが、前向きに予算は要求していきたいという立場ではあります。

○公立高校入試日程の前倒しによる期待される効果

(NHK)

公立の入試日程が3月1日になったことによる一番のメリットは、準備期間が取れることだということでしたが、準備期間をとれることによって、生徒さんや保護者にとってどのようにいいメリットが生まれるのでしょうか。プレ入学することが中退や不登校の予防にリンクしてくるということでしょうか。もう一度、その辺りを伺ってもよろしいでしょうか。

(水野教育長)

公立の入試日程を3月1日に前倒ししたのは当然、課題があるからなんですよ。府立高校の中退率と不登校率が高いという課題です。せっかく入った子が辞めてしまう、来なくなるというのは、やはり課題です。

もちろん、理由があって課題視しない場合もありますが、そういう子たちがなぜそのような状況に陥るのかというところを考えたときに、見立てが違っていただであったり、はたまた例えば発達特性などの中学校のときの子どもの情報がわかっていれば、高校の先生でも対応できたかもしれないであったりと、学校側の情報不足、子どもと学校側のマッチングの不足などが一定あるという見立てを持ちました。

それがなぜできていないのかと考えていったときに、現制度においては、今年の合格発表は3月21日で、2次募集もございました。そして、その発表がまさに昨日です。そうすると、3月28日から中学校現場も次年度の人事体制を考えなければならない、高校も入試採点が終わって次年度の人事も変わっていく中で、一人一人の子どものそういったアセスメントの結果の引き継ぎが、なかなか難しいところがあります。

であるならば、その期間をもう少し先生方の働き方改革の視点も必要なので、早くしておけば予防に繋がるのではないかと。これがメインの理由です。